

〈論文〉

文酒唯須らく舊好を修むべし

宮島誠一郎と清国公使団員との筆談考 (一)

張 偉 雄

(一)

一八七一年、中国と日本の間に「中日修好条規」が締結された。一八七四年二月、明治政府は「条規」の第四条によって、柳原前光を初代の中国駐在公使として、北京に派遣した。清朝政府は日本より遅れて、一八七六年十二月（光緒二年）何如璋を初代駐日公使に任命した。翌年十一月、公使何如璋は副公使張斯桂、書記官黄遵憲を率いて日本に赴任してきた。これは近代中国が、日本に派遣してきたはじめての政府外交使節団であった。この公使団は中国の一流の文人からなっていた。日本の漢学者たちは、長い年月中断されていた中国の文人との公式交流が、再び可能になったことを非常に喜んでいて。

書記官黄遵憲の『日本雑事詩』のために跋を書いた三河石川英（石川鴻齋）は、その跋の中で、この時、清朝の駐日公使館をめぐる日中の文人間の交流様相について、「入境以来、経を執る人、字を聞く人、詩を乞う人で、戸の外はいつもいっぱいであるが、この人々は皆、満足して帰っていく」①と描いている。

公使館員と筆談するために、しばしば訪ねて来た日本の友人の一人に、もと高崎藩主であった大河内輝声がいた。彼は毎日のように中国公使館へ筆談に行くので、日本人の友だちが彼を公使館の「五月蠅」だという。「五月の蠅はおいはらっても、すぐにもどってくる。輝声はそのように公使館にいりびたりだという意味」②であった。近代中国使節団の来日は、明治初年の中日両国の文化交流の場を広げ、大きく花を咲かせたのである。

一八八二年、公使館書記官黄遵憲は、四年間の日本駐在を終え、アメリカのサンフランシスコ駐在総領事に任命された。離日に当たって、かれは日本滞在中での文化交流の盛況を、別れの詩「奉命為美国三富蘭西士果総領事留別日本諸君子」に、次のように書きとめた。

海外偏留文字縁 新詩脱口每争傳
草完明治維新史 吟到中華以外天③

海外の国にもかかわらず文字の縁を結ぶことができた。新しい詩を書きあげる毎に競って詠み伝えてくれる。明治維新の史書を書き完え、中華以外の天地に吟み到る。外国である日本に来て、文字の縁を結ぶことができて、黄遵憲は非常に幸せに思っていた。このように、公使館員たちは、日本の文人たちと詩文の贈答ができ、文人の趣味を共有することができた。これによって、後日かれらの多くは本当の意味での知日家になれた。公使団員たちが来日した明治十年の頃、日本では欧化熱が高まりを見せる一方であったが、尚多くの漢学的教養の高い識者が存在し、中国との友好的な交流を切望していた。かれらの活動によって近代最後の漢学の隆盛期を作り上げたのである。このことについて次のような指摘がある。

明治時代は一般に洋学の流入によって、漢学は衰微したと考えられがちであるが、事実は全く逆で、漢詩漢文の伎倆は空前の発達を見た。

大町桂月は「明治文壇の奇現象」と題して、「明治の世となりて、西洋の文学や思想や俄に入り来れり。是れまだ奇とするに足らず。小説面目を改めて勃興せり。是れまだ奇とするに足らず。新体詩勃興せり。これとても奇には非ず。ただ廢滅するなるべしと期したる漢詩が却って盛んになり、且上手になりし事は吾人の不思議に思はざるを得ざる所なり。漢籍入りてより二千年、漢詩を作る伎倆の発達せると、まだ明治時代の如きものあらず。」という。④

大町桂月のいうこの「奇現象」の発生原因として、猪口篤志は四つの事実を指摘している⑤。その第一は、「幕末以来、作詩の技量が進歩し、士人は己の思想感情を発表する工具とした。その伝統が受けつがれて旧幕時代の諸侯、維新の元勳、政府の高官、学者、軍人等皆詩を善くした。国民の崇敬する所がそうであるから、これが詩道の鼓吹に役だったこと」という。この指摘は全く正当なものであると言えよう。明治の西洋崇拜の時代にも漢文化の影響が依然強く存続していることを作家の筆名の例によっても、その一端を窺うことができる。西洋の文学の影響を受けた新しい文学者を見てみると、坪内雄蔵が逍遙と名乗り、尾崎徳太郎が紅葉と名乗り、森林太郎が鷗外、夏目金之助が漱石と名乗った。これは、西洋のペンネームというよりも、中国の文学者の号にまねたものだと言えよう。

第二にあげられるのは「私塾・詩社の存続」である。第三の原因としては、「印刷術の発

達で、雑誌、新聞、詩集の刊行が交易となり、作者は自由に投稿出来た。」ということがあげられている。この点については、公使館員の黄遵憲も、同じ見解を持っていた。彼は「明治名家詩選序」の中で明治の漢詩が「多卓然成家、遠軼前世」であった原因として、次のように指摘した。

徳川氏の半ば以後、禁網が繁密となり、常に文字の束縛で儒者が投獄された。これが原因で、学士大夫は筆を弄い文を為すことを敢えてしなくなったのである。明治維新以来、文の禁網がなくなり、人々は忌諱のことを気にせず、初めて自分の意志で詩が作れるようになった。今日詩作が大変盛んになったのは、このためである。⑥

第四に、中国との交通が開け、日中両国の人士が頻繁に往来接触できるようになったことによる影響である。具体的には、明治初年に来日し末年まで滞在した王仁成（字は治本、号は漆園）による聞香社の設立や、公使何如璋、黎庶昌及び公使館員黄遵憲、沈文熒らとの交流、および日本人の中国留学などによるものである。この点については、明治十二年に、日本を訪問した王韜も同じような感想を持っていた。「日本雑事詩序」の中で、彼は次のように書いている。

日本に文教が開かれてから、既に千余年が経った。しかし、文章、学問が盛んになったのは最近のことである。この時期において公度（黄遵憲）の助力を得たことは、ほんとうに千載に一時の良機である。⑦

王韜の論はある程度言い当たっている。黄遵憲ら、中国の文人が日本の漢詩壇の文士と盛んに交流したことによって、日本の漢詩の隆盛は、一層促進された。他方、中国の文人たちも日本文人との交流によって、自分の漢学的価値が認められ、互いに認め合う友好的な雰囲気を保つことができた。このことにより、かれらが日本の文化を客観的に観察し、評価することができたのである。

(二)

公使団員との交流の多い日本友人の中に、宮島誠一郎という人物がいた。宮島誠一郎（号栗香、養浩堂）は、幕末の天保九年（1838）七月二十日に米沢藩で生れた。父は上杉家の家臣であった宮島一郎左衛門吉利（号一瓢）である。父吉利は藩の右筆役であり、書

記、記録担当者として誠一郎に多くの影響を与えた。宮島誠一郎は藩校興讓館に学び、その俊才ぶりが大いに認められ、のちに興讓館の助教を勤めた。かれはまた窪田梨溪に師事して漢詩を学んだ。幕末維新时期に宮島誠一郎は江戸藩邸詰めとなり、明治戊辰戦争に際して藩命により、奥州列藩同盟のとりまとめに動き、大政官宛に建白書を提出した。明治二年に勝海舟の紹介により、大久保利通と面識を持ち、翌三年に下院に出仕、さらに同四年に左院議官職に任じた。明治九年、修史局に移った。明治十四年、宮内省御用掛となり、同十七年に宮内省参事院に任じ、二十六年に宮内省非職となり、二十九年に貴族院議員になった。明治四十四年（1911）七十三歳で生涯を閉じた。

宮島誠一郎文書から見ると、明治九年に修史局に転じるまでは、旧土佐、薩摩藩士あがりの官吏との交渉が多く、政局の中心にあって政府の要人に直接意見を具申することが多かった。国際政治に対する認識について、宮島誠一郎は勝海舟と多くの共通点があった。勝海舟は幕末にあってすでに中国、朝鮮との同盟構想を提唱していた。征韓論はもちろん、のちの日清戦争にも勝海舟は強く反発していた。これらの点において宮島誠一郎は勝海舟と共鳴していた。修史局、宮内省時代には、ちょうど中国清朝政府が、日本にはじめての公使団を、東京に派遣してきた。そのとき漢学で自分の素養を培った宮島誠一郎は、優れた漢詩文家でもあったので、中国の学問や伝統文化に強い関心を持ち、当時の欧米迎合的な世相には批判的な目を向けていた。それゆえかれと清国公使館関係者との交流は自然に頻繁になった。

公使館の書記官黄遵憲は『人境廬詩草』巻七に、宮島誠一郎を思って作った詩がある。以下にその詩と自注を挙げる。

一龕燈火最相親 日々車声輟麴塵
絶勝海風三日夜 拏舟空訪沈南蘋⑧

宮島誠一郎、彼は麴町に住んでいて、大使館に近い。会うたびに、必ず詩を論じる。昔、画郎沈南蘋⑨が長崎に来た時、頼山陽がその名を慕って訪ねて行った。しかし、途中台風に影響され、舟が三日間遅れた。着いたとき、南蘋はもう国に帰ってしまっていたので、会うことが出来なかった。頼山陽はこれを一生の不覚と感じた。

公使館の近くにあった一家の灯火は、最も親しみを感じていた。毎日行き来する車輪が麴町の塵をきしる。この交友の楽しみは絶対に頼山陽が、海の風に三日間舟を引きとめられて空しく画郎沈南蘋に会えなかったことより勝るものだ。詩の中で、黄遵憲は宮島誠一郎との間の深い友情を賛えている。頼山陽が憧れの人を訪ねていったが、不覚にも会うことができ

なかった喩え話を作り、自分たちのほうが「日々車声輾麴塵」のように、毎日互いに会える喜びを歌った。

黄遵憲は曾て、宮島誠一郎のことを「彼の絶詩、律詩には極めていいものが有る」と賞賛した。一方、宮島誠一郎は筆談原稿の中で、黄遵憲が日本を離れて、アメリカへ赴任した時の自らの気持ちを、次のように書いている。「私は公度（黄遵憲）との交友が一番深い。別れるに当たって、ほんとうに暗然としていた。」⑩ 別れの詩に、宮島誠一郎は黄遵憲のことを次のように詠った。

渤海初浮星使舟 知君参贊果名流
五年帷幕織籌策 萬里江山縦勝遊
文酒唯須修旧好 戈矛何敢詠同仇
明朝又向東洋去 一挙鵬搏大地球⑪

渤海に初めて使節の舟が来航してきたとき、参贊官としての君が世の中の名流に違いないと思っていた。その通り五年間の公使館生活で、君は策略を立て外交の広い舞台を自由に往来している。詩文酒宴をもって長い伝統ある友情を固めていくべきで、矛先を向かい合うようなことを唱えるものではない。明日に君は東洋を出発するが、大鳥が大地を羽ばたいて飛び上がるように、遠大な将来を祈る。

このように、公使館員と交友を深めていた宮島誠一郎は、公使館員との間に、膨大な筆談の原稿が残している。次に宮島誠一郎と公使館員との交流の一端を、筆談から窺ってみたいと思う。

(三)

宮島誠一郎と公使館員との筆談が「宮島誠一郎文書」に見える。この文書の一部分は国会図書館憲政資料室にも散見されるが、大部分は宮島家によって保存されていた。一九九三年に、同文書の保管は宮島誠一郎の直系子孫宮島吉亮氏のところより、早稲田大学図書館に移った。

この文書群について、御厨貴が『宮島誠一郎文書目録』⑫を編集した。平成九年に早稲田大学図書館により、新たな『宮島誠一郎文書目録』⑬を編集発行している。早稲田大学図書館は、この「宮島誠一郎文書」を特別図書扱いとして、「文書27」の番号を付けてい

る。文書の中にある公使館員との筆談の部分について、早稲田大学図書館編『宮島誠一郎文書目録』によって、「記録之部」C.に分類されている。

本論は宮島誠一郎と清国公使館員との筆談の研究の一環として、まず最初に宮島誠一郎と公使館員が、初めて出会った時の二つの場面に絞って、かれらの筆談世界の一端を窺ってみたい。その一は、宮島誠一郎が清国公使と初対面のときの筆談である。その二は、旧暦正月に公使館員と交わした詩の唱和などである。

一、明治十一年二月十五日の筆談、宮島誠一郎が東京の芝山にある清国の仮公使館を訪ね、清国公使と初めての筆談を交わした。^⑭

明治十一年戊寅二月十五日訪清國欽差大臣何子峨如璋君，副差大臣張魯生斯桂君，於芝山內假公署月界院筆談。

誠一曰：久聞隆名，始接芝眉，溫容靜穆，自見大人氣象，但未通貴邦之語，而又未能筆語，心意爲塞，請教。

張魯生曰：弟初至貴國，欲得通儒而晤談之，不勝欣甚，今見閣下，喜溢眉尖，又復溫潤中和，更覺慰懷，將來多有請教。惜以未通言語，未能暢所欲言，不無歉仄。

誠曰：貴邦與敝國比鄰，才劃一帶水耳兮，兩國皇帝互派使臣，以結交誼，則訂盟之始，而兩公適奉使命而來，爾後益親睦，互謀兩國洪福，何幸加之。

張曰：貴國與我國爲友鄰，同屬東洋，不如西洋之疏，自然親密，且本地居民衣服禮儀多有相同之處，其初必有自我國來者，可知原是一家人也，但願自今以後，永遠和好，非獨我國之幸，抑亦貴邦之福也。

何子峨曰：貴國新設學校，以漢學爲教者，仍有幾處，仕進之途，以漢學入選者，是何名目。請示知。

誠曰：敝國維新之後，文物制度並未整定，至學校尤屬創業，邦人本儘修漢學，取士之道，亦專以漢學任選，方今學歐洲之法，不過取長以足國用耳，修身道德，豈復有盛於孔聖者哉。

何曰：貴國聖廟基址極宏，宮殿結構亦如中式。又廟旁房屋極多，未識可以租寓否。

誠曰：聖廟基址，政府假以爲書籍縱覽所，不許租寓，頃有興聖廟之論。

誠曰：貴邦與敝國，唇齒相持，真兄弟之國也，近年泰西氣運方極旺盛，火船火車與電綫並通，才有釁端，便開兵事，以逞吞噬，今也東洋幸無虞，豈可安逸怠惰，以喜一日之無事哉。兩大國宜以此時，益厚交誼，以圖他日也。高明以爲如何。

何曰：尊論是極刻，以亞細亞洲論，惟我國與貴國形勢最近，交亦宜倍親近，貴政府改從

西法, 以求富強, 亦是救時之策, 惟改服制與曆朔二者, 似爲過計。頃我國於兵船各制, 亦事事講求, 惟政治之大者, 如禮樂文章之類, 則自有聖教可遵, 千古不廢者也, 質之高明, 以爲然否。

以上の筆談より、まず注目すべきことは、宮島誠一郎と清国公使何如璋の日中兩國の関係は「兄弟之國」という共通の認識である。宮島が言うには、「貴國とわが國とは唇齒相依り、正に兄弟の國です。」この認識のもとで、かれらの對西洋認識は一致していた。宮島誠一郎「近年西洋は氣運が極めて旺盛で、汽船、汽車、電話などによって、消息が相通じています。彼らは何かあったら、すぐに兵を挙げ侵攻してくるのです。幸いなことに今の東洋はまだ無事ですが、油断してはいけません。日中兩大國はこの時にこそ將來のために厚く友情を結ぶべきです。ご見解は如何ですか。」との見解に対して、公使の何如璋は「ご高論ごもっともです。アジアにおいて、わが國と貴國の情勢はもっとも似ているのです。したがってもっとも深い友情を結ぶべきです。」と応対していた。

以上の筆談に、また西洋文化の導入と伝統文化との関係についても、言及していた。宮島誠一郎は「今日、西洋のことを学んでいます、わが國の必要に応じて、その長所を取っているだけで、修身道德に関しては、孔子の教えを越えるものはありません。」と言っているのに対して、何如璋は「近ごろ、わが國も兵船や各種の制度などの面で西洋に倣い、改革をしています。ただ政治など重大なことについて、たとえば、礼樂文章などは遵うべき聖人の教えがあるので、それは永遠に廃止することはないでしょう。」と共通な見解を表した。

明治十一年二月、中国の旧曆正月に宮島誠一郎が公使館員を自宅に招待した。その場で正月らしく楽しい友好的な会話を交わした。^⑮

二月二十七日、張副使魯生斯桂、沈知州梅史文煢、及王治本王琴仙來訪。

誠曰：寒威未除、想興居住適、奉賀奉賀。今日枉顧、茅屋生輝、但憾無一物慰尊懷、赧慚之至。

張副使曰：本擬早來拜謁、緣公事匆忙、故濡遲至、今又因大久保參議利通枉顧、傾談久之、以致來遲、望爲宥恕。

沈梅史曰：久仰大才、今得識荆、甚幸。倘得常奉教於君子、何快如之。

張曰：尊府地位頗好、風景亦佳、到此頗暢襟懷、復有曾根先生能通漢話、更可長談、愈覺樂甚。

誠曰：公等奉使東來、結兩國之交誼、所謂任重道遠者、雖則賢勞、豈又不壯乎。

沈曰：方今兩邦和好，弟輩貴邦奉使，得晤諸公治世名賢，實社稷蒼生之福也。

誠曰：一堂笑歡，兩國交際，真未易得之事也，肝膽相照，素無彼我之別。

沈曰：朝廷修睦，朋友交歡，上下同情，在此時也。

誠曰：始見琴仙兄容貌秀雅，方知襟懷絕塵，自今請屢被枉顧，但愧茅屋欠禮待耳，漆園兄亦係久交，文士之交素不要嚴恪，放懷可也。

王琴仙曰：僕抵貴國後，漆兄談及盛名，如雷貫耳，本擬早登先生之堂，一瞻道範。奈俗務繁身，有志未逮，今日趨謁得識尊顏，曷勝欣幸之至。尊府夏屋渠渠，更以優禮待僕等，反出此謙言，先生正易所謂謙謙君子也。

誠曰：僻區極乏需用，僅辦野酒山肴而已。願獻一杯以却春寒，如何。

沈曰：主人厚惠，謹當領命，弟初來貴邦，諸事未暗，幸遇高人賜教，欣幸欣幸。

誠曰：是敝邦所產蜜柑，聞移自雲州，此種橙柑，不識貴邦產於何地，雲州何省，請示。

沈曰：非雲州，溫州也。我國黃柑以永嘉為美，今之溫州府屬浙江省。

誠曰：家君今年七十二，敬拜諸公。

沈曰：尊大人年高德劭，今得拜見，喜見道範，欽仰欽仰。

これは副公使張斯桂と公使館隨員沈文燮、さらに民間人の王治本、王琴仙が加わっての訪問であった。この王治本は、号漆園、明治八年に来日して、後に元高崎藩藩主の大河内輝声の家に住み、詩文の顧問もしていた。王琴仙、本名は藩清で、王治本の同族の人である。張斯桂の筆談に大久保利通のことも出て来たが、清国公使館は、大久保のことを信頼して、日中間の交流にかれの尽力を期待していた。宮島誠一郎の証言では、公使何如璋は、かつて大久保利通と「東京中央に日支両国の語学校を開き互に四名の教師を延き両国の生徒六十名をして語学に従事せしめ大に両国の洪益を謀らんとす」^⑥ことを計画していた。しかし、まもなく明治十一年五月十四日の大久保利通の被殺により、この計画が挫折した。大久保の被殺について、何如璋はかなり憤慨して「頑固の俗が未化、十年來貴国の文明は進歩が無い」^⑦と言った。筆談にさらにもう一人の人物は曾根俊虎（1847～1910）も加わっている。この人は宮島誠一郎と同じく米沢の出身である。後に海軍大尉、興亜会中心メンバーにもなった。一八七三年、かれが副島種臣外務卿と共に清国に赴き、中国各地を調査した。『清国近世乱史』（1879年）を著している。筆談の中で曾根のことを「漢話に通じている」と書かれている。この日は、このような文人によって知的な会合を楽しんでいた。この日の筆談には、政治のことや、外交のことが出てこなかった。その代わりに、宮島誠一郎の父吉利（一瓢）の「古稀自賀詩」に和して、楽しい文人詩の唱和を繰り広げた。

錄古稀自賀詩，以呈何張二星使，七十二一瓢。

七十古來稀 兒孫繞膝繫
一瓢吾樂足 清福是天恩

和一瓢老大爺原韻，並請榮正，光緒四年春正月 張魯生未定稿

椒酒方流馥 辛盤共薦新
登堂來介壽 扶杖醉新春

敬和一瓢尊丈元韻 晚生沈文熒拜稿

珪璋爲國瑞 蘭桂繞牆繫
鳩杖東皇賜 優遊荷主恩

謹書戊寅元旦詩以乞正 男誠一再拜

人生樂事貴天倫 把酒團樂祝歲新
垂白老親顏似玉 古稀添得二回春

茲謹依原韻錄呈栗香先生一敲 弟張魯生拜

玉屑霏來妙絕倫 談餘扶出白頭新
門庭蔭庇椿陰茂 長我年華有九春

奉和栗香先生原韻 弟沈文熒未定草

淵亭嶽峙表人倫 拜謁樽前白髮新
東海仙翁蓬島住 年年詩酒醉和春

步韻奉和栗香大人詩 浙東王治本拜

擬將歌詠代伶倫 把酒歡談契酒新
蘇氏老泉今得見 一團和氣挹長春

步栗香仁兄大人原韻 王琴仙拜草

一枝妙筆出群倫 刪訂詩書約法新
椿樹陰濃蘭甲坼 華堂進酒祝長春

奉和栗香大人芳韻 曾根俊虎拜
滿室之人皆絶倫 定交詩酒興方新
不關浮世榮枯事 笑醉扶來桃李春

博曾根先生一笑 張魯生草
情深如水有汪倫 爲勸加餐語語新
一事差堪噴飯笑 君家二月我初春（陽曆二月即光緒四年正月）

これらの詩の唱和は、正に曾根俊虎の詩によって描かれたような和氣藹々で、暫らく騒々しい世の中を忘れた楽しい一時であった。「この家に集まったのは、みな群を抜いて、すぐれた方々である。友情のちぎりを結び、詩あり酒あり、正に楽しいかぎりであった。世の中の榮枯盛衰と関係なく、笑って酔っ払って桃李の花満開の春をさそってこよう。」と曾根俊虎は詠った。

誠曰：拙稿經張公電正否，又問尊序成否如何。

王治本曰：張大人處，尊稿已評定，今日匆匆忘携來，拙序未脫稿。

誠曰：僕用邦音吟詩，願諸公一聽之。

王琴仙曰：先生之音僕雖不知，而抑揚節奏，僕固知之。先生蓋善于謳歌者。

沈曰：弟雖文士，亦嘗從軍塞上。

誠曰：他日願拜塞上傑作。

誠曰：豚兒大八，今年十二，才習文字，自今後願受大方之教。

沈曰：佳兒狀貌魁梧，定是天上麒麟。

王琴仙曰：初謁雲宇，又叨佳釀，實深挹歉，僕一介書生，碌碌無長，過蒙獎譽，益滋慚愧。

沈曰：飫領塵教，叨擾佳肴，銘感於心，謝謝。暇日史裁有暇，當再暢談，此際正宋子京軸簾燃燭修史之時，弟不敏敢告辭矣。

酒宴が終わりに近づき、宮島誠一郎は「わたしに日本語で詩吟をさせてください」と言って、吟詠しはじめた。その朗々たる詩吟を聞いて、王琴仙は「先生の読んだ音は分かりませんが、抑揚に富むリズムに感動しました。先生は謳歌に長じている方ですね」と称えた。その勇壮な調子に感動されたのであろう。沈文燧は「小生は文士であるが、かつて辺境の要塞に従軍したこともあった。」と言って、感動され、往時従軍していたころのこと

を思いだした。

最後に宮島誠一郎の次男、十二歳の宮島大八（詠士）（1867～1943）が登場してきた。その容貌を見て、沈文燧は「立派なお子さんで、天上の麒麟になる人物だ」とその将来を称えた。後にかれの言葉は果たして現実となった。近代日本の中国語教育を語るとき、『官話急就篇』という書物がいつも話題に浮かんでくるものである。これは一九〇四年に東京にある善隣書院から発行された中国語会話教科書であり、その著者は、この宮島大八である。宮島大八は明治二十年（1887）から二十七年（1894）にかけて、中国にわたり八年間漢学、書法の勉強をし、帰国後、善隣書院を創立して、中国語教育、書道教育に大きな功績を残した。

明治二十二年（1889）宮島大八が中国留学をしていたとき、北京に行き、昔東京で面識のあった父親の友人である黄遵憲を訪ねたことがあった。その時のことを黄遵憲は次のように書いている。

「去歲在京，有持宮島某名刺來謁，及延見，乃知爲從前侍坐之童子大八郎也，頭角嶄然，能作華語，栗香有爲子矣。」^⑧

これは明治二十三年、黄遵憲がロンドンの公使館に赴任していたときに、宮島誠一郎に出した手紙に書いているものである。昔父親の傍におとなしく坐っていた少年が、中国語も話せるようになり、立派に成長していることを、黄遵憲は喜んでいた。このように宮島大八の中国留学、そして、後日日中文化交流の棟梁となったきっかけを作ってくれたのは、その父親宮島誠一郎、そして当時東京に駐在していた清国公使団の人々であった。

この明治十一年二月の宮島家での筆談は、その時代を生きた日中両国の文人たちのある日常を再現してくれた。当時何気なく書きとめたものが、今日歴史の証人として、明治初年の日中両国文人の交流史を語っている。

注

1. 『日本雑事詩』 湖南人民出版社 1981年 241頁
2. 『大河内文書』 平凡社 1964年 210頁
3. 『入境廬詩草箋注』 上海古籍出版社 1981年 340頁
4. 猪口篤志『日本漢文学史』 1984年 角川書店 506頁
5. 『日本漢詩鑑賞辞典』 1980年 角川書店 36頁
6. 鄭海麟・張偉雄編『黄遵憲文集』 中文出版社 1991年 119頁
7. 『日本雑事詩』 序 湖南人民出版社 1981年

8. 『人境廬詩草箋注』上海古籍出版社 1981年 583頁
9. 沈南蘋、中国清朝の画家、浙江呉興の人。1731年に日本に渡り三年間在住した。しかし、事実として江戸後期を生きた頼山陽（1780～1832）は沈に会えるはずがなかったものである。
10. 早稲田大学図書館蔵「宮島誠一郎文書」文書C27-C12
11. 同上
12. 御厨貴編『宮島誠一郎文書目録』宮島誠一郎文書研究会 昭和60年
13. 早稲田大学図書館編集・発行『宮島誠一郎文書目録』平成9年
14. 早稲田大学図書館蔵「宮島誠一郎文書」文書C27-C7-1
15. 同上
16. 『興亜公報』第一輯 明治13年3月24日 15頁
17. 実藤恵秀・鄭子瑜編校『黄遵憲與日本友人筆談遺稿』早稲田大学東洋文学研究会 1968年 146頁
18. 国会図書館憲政資料室蔵「宮島誠一郎文書」「黄遵憲光緒十六年臘月廿日英倫使館作」

※ この論考は平成十一年度札幌大学研究助成による研究の一部である。資料調査にあたり、早稲田大学図書館、神奈川大学大里浩秋教授より多大なご好意を蒙った。合わせて感謝の意を表したいと思う。